

キリトがユウキと付き合う世界

槍雅衣斗

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

キリトがユウキと冒険し恋に落ちて行く物語です。

物語の始まりはALOでアスナが連れて行かれた後くらいから始まります。

注意書き

キリトは最初、誰とも付き合っていないです。

キリトには、二刀流のソードスキルを使える設定にしています。

(使うかは分かりません)

駄文です。

投稿が遅いかもしれません。

出来れば見て行ってください。

目次

| | |
|--------------|----|
| プロローグ | 1 |
| スリーピンググナイツ!! | 5 |
| キリトとユウキの関係!? | 8 |
| 第4話 | 11 |
| ボス部屋前の話 | 15 |
| ギルド抗争前 | 17 |

プロローグ

アスナ「ねえユウキ、何処に向かっているの？」

私は今、ユウキに手を引かれる形で空を飛んでいます。

どうしてこうなったかと言うと……

1日前

リズ「ねえアスナ、絶険って知ってる？」

アスナ「ぜっけん？新しいスキルか何か？」

シリカ「違いますよ。絶険とは人物の名前です」

リズ「何でも24層の北の方にあるでつかい木の下で毎日デュエルをしているのよ」

デュエルとは、プレイヤー対プレイヤーの対戦に用いられるシステムで、『初撃決着モード』『体力半減決着モード』『体力全損決着モード』の三つがある。

リズ「それでね、その子新参者なんだけどコンバートでね、デュエルの相手を掲示板で対戦相手を募集したみたいでね、皆んな『生意気だー！』と言って挑んだんだけど……」

アスナ「…もしかして皆んな返り討ち？」

シリカ「そうなんですよー。それもHPを3割も削れた人は誰も居なかったんですよー」

アスナ「へえーそんなに強いんだ。なら皆んなは闘ったの？」

シリカ「私は戦ってませんけど……」

アスナ「ならリズは？」

リズ「こてんぱんにされました……」

アスナ「それ本当!?!？」

アスナが驚くのも可笑しくは無かった。

リズベツもあのデスゲームを生き残った猛者なのだ。

リーファ「はい。それに私も挑んだんですけど負けてしまいました」

アスナ「リーファちゃんまで!?!?」

リーファはALO内でもトッププレイヤーに値するほどのプレイヤーなのだ。

アスナ「あつ!ならキリト君は?」

キリト「俺ももう戦ったよ」

アスナ「なら結果は?」

キリト「負けたよ」

アスナ「そんな!!?」

キリトはSAOでは攻略組であり、その中でもトップのプレイヤーであったのだ。

アスナ「でもそんなに強いなら、誰も挑まないんじゃない?」

リーファ「それがそうでも無いんですよ」

リズ「絶険は賞品にOSSを掛けるのよ」

シリカ「しかもそのスキルは11連撃ですよ!」

アスナ「11!?!?」

OSSとは、オリジナルソードスキルの略称で、その名の通り自作のソードスキルを使えるシステムなのだが、OSSにするためには、システムアシスト無しで、システムアシスト有りの時と同じ動きと速さが求められるため、基本的には、誰もしようとは思わない。

アスナ「へえー、それなら少し気になるわね。そう言えばそのコンバートのプレイヤーはSAO生還者の可能性は無いの?」

キリト「ああ、それは無い。もし、彼女が生還者なら、二刀流は俺では無く彼女に渡って居ただろう」

キリトはSAO時代二刀流と言うユニークスキルを持っていた。

その二刀流とは、SAO内最速の反応速度を持つ者に与えられるスキルなのである。

アスナ「うん?彼女?どう言うこと?キリト君?」

アスナは鬼の形相になっていた。

キリト「どう言うことも何も絶険は女の子なんだ」

アスナ「キリト君またフラグなんか立てて無いよね?」

キリト「フラグ?何のことだ?」

シリカ「キリトさんに聞いても無駄だと思いますよ」
リーファ「でもお兄ちゃん、絶険さんと何か話してたよね」
キリト「ああ、ちよつとな」
アスナ「へえー、ついでにどんな話をしたの？」
キリト「何でそこまで言わなきゃいけないんだよ」
リーファ「お兄ちゃんずっとこんな感じなんです」
キリト「も、もう良いじゃないか！それよりもアスナは絶険と戦うんだろ？なら今日はもう落ちた方が良くないか」
リス「それもそうね。なら明日此処に昼一時に集合！」
「二二分かった（りました）」

現在く

こんな感じに1日が過ぎて次の日のお昼に皆んなで集まって行ってそこでもなんかいろんなことがあったな……

デュエル会場く

私達が着いた時には人が集まっていて、その中央上空からサラマンダーが落ちて来たところだった。

「こ、降参だ、リザイン」

そう男が叫んだ後に女の子が続くような形で降りて来た。

「ブイ！」

何あの子、可愛いじゃない。

キリト「アスナ、行くんだろ？」

アスナ「へ、あー、えつと、心の準備が出来てないからもうちよつと後がいいなーって」

キリト「そんなの言ったら始まんないぞ」

キリト「おーいユウキー、次はこの子ご相手になるよー」

キリトが呼ぶと絶険さんは嬉しそうに近づいてきた。

ユウキ「あれ、キリト、どうしたの？また戦う？」

キリト「いや、今回は俺じゃなくて、俺の仲間が戦うよ」
何かキリト君と絶険さんが仲良く話してるんだけど？

ユウキ「お姉さん、やるんでしょ」

アスナ「ええ、殺るは」

リズ「アスナ落ち着いて、どうどう」

アスナ「ふうー、ごめんなさい、やるから少し待ってて貰えるかしら？」

ユウキ「うん！出来るだけ早くきてね」

そう言っているとユウキ(?)は中央に戻っていった。

アスナ「ねえキリト君？どう言うことかしら？あれ？」

キリト「どう言うことって言われてもなあー」

アスナ「後でちゃんと説明してね」

キリト「了解。アスナも頑張って来いよ」

現在

こんな事があってその後戦って、OSSを出されて負けた後に（殺されてはいない）「んーいい感じ。お姉さんにきーめた！」ってユウキに言われて今に至る。

これって大丈夫なのかな？

スリーピングナイツ!!

ユウキに手を引かれて着いたのは『浮遊城アインクラッド第27層主街区ロンパール』である。そこにある一つの酒場に入ると……

???「ユウキ、今日は早いですね。それで今日は見つかりましたか？」

ユウキ「うん見つかったよ」

???「もしかして後ろにいる人がそうなのか？」

ユウキユウキ「うん、そうだよ！」

ユウキに連れられて酒場に入ったらユウキの仲間らしき人達が居た。

???「それでは自己紹介させていただきますね。私はシウネーです。以後お見知り置きを」

アスナと同じウンディーネの彼女、シウネーさんはアクアブルーの髪を両肩辺りまで伸ばして、濃紺の瞳でしっかりとこちらを見ながらウエットな声で自己紹介をした。

それについてサラマンダーの小柄な青年も自己紹介をした。

???「俺はジュン！よろしくな、アスナさん！」

サラマンダーの青年、ジュンの後に、その隣に居たノームの男性がいった。

???「そして僕がテッチって言います。よろしくお願ひします」

ノームの男性、テッチに続いてさつきまでお酒を飲んでいたらしいスプリガンの女性が、名乗った。

???「アタシはノリ。よろしくね、アスナさん」

スプリガンの女性、ノリが名乗るとアスナの隣にいたユウキが前に出て、元氣よく言った。

ユウキ「そして僕がユウキ。一応ギルドリーダーで、これが僕のギルド、『スリーピングナイツ』だよ！」

ユウキが手を広げて言うと、スリーピングナイツの方に向いた後アスナの紹介をしようとした。

ユウキ「そしてこっちの人が、えつと」

アスナ「初めましてアスナです。よろしくお願ひします」

アスナ「それでユウキ? どうしてここに連れて来たの?」

ユウキ「あれ? 言ってなかったっけ?」

アスナが聞くとユウキは小首を傾げて、頬に指を当てて言った。そしてその発言を聞いたスリーピングナイトの皆さんが驚いたようなユウキならやりそうだと思っっているような顔をしていた。

ユウキ「ごめんごめん。えっとね、アスナにはちよつと手伝って欲しい事があるんだ」

アスナ「手伝って欲しい事?」

そう言われてアスナは考えた。ギルドを組む理由は仲間とワイワイやりたいという理由と、攻略をしたいという大まかに分けるとこの二つしかない。ただ、これは大まかに分けたからであって、他にも作る理由はある。例えば……

アスナ「まさかとは思うけど、他のギルドと戦争を起こす気?」

ユウキ「? ああ! 違う違う。手伝って欲しい内容はね」

このフロアボスを一緒に倒して欲しいんだ」

アスナが警戒したのは他ギルドと戦争をしようとしているかだったのだから、それは杞憂で終わった。ただし、ユウキから新しい爆弾が落とされた。

アスナ「フロアボス!?!」

ユウキ「そう。フロアボス」

アスナ「フロアボスを倒すならでっかいギルドに行った方が良くと思うんだけど……」

ユウキ「それだったらダメなんだ」

ユウキは少しだけ顔を暗くして言った。

アスナ「ダメって、どうして?」

シウネー「私達はもうすぐこのゲームから去らなくてはいけないんです。ですので最後の思い出として『剣士の碑』に名前を残したいんです」

剣士の碑。それはSAOでは生命の碑と言い、SAOでは死んだ人の名前の所に日付と死因、そしてそのプレイヤーの名前の上に線が引

かれる物だったが、ALOでは生命の碑が本来の役割、つまりフロアボスを倒したギルドのメンバーの名前が刻まれるというシステムなのだが、二つ以上のギルドが協力して倒すと、そのギルドのリーダーの名前しか刻まれないのであった。

アスナ「そういう事なら分かったわ」

ジュン「ホントですか!」

アスナ「ええ、本当です」

ユウキ「ありがと、アスナ」

アスナ「それは良いんだけど、ギルドで挑むなら後もう一人入れれるけどそれはどうするの?」

ノリ「その事なら大丈夫。ユウキが知り合いを呼んでくれるらしいから」

アスナの疑問にノリが答えた。

ユウキ「うん、そう。だからいまから来て。出来るだけ早くね」

アスナ「ユウキ?どうしたの?」

ユウキ「最後の一人に来てもらうからちよつとだけ待っててね」

アスナがノリに疑問を聞いているすきに、ユウキが誰かに通話をしていたらしい。

そしてそれから少し待つと、酒場の扉が開いた。

???「おーい、ユウキー?来たぞー」

アスナはその声を聞き、すぐに振り返った。そしてそこにいたのは、

SAO時代によく一緒に戦い、その胸ポケットにはナビゲーションピクシーとは名ばかりSAO時代から少しの間だけキリトと一緒に居た少女が顔を覗かせていて、アスナがいま恋い焦がれている人がいた。

アスナ「キリト君!」

キリト「おく、やっぱりアスナが選ばれたか」

ユウキ「やっほー、さつきぶりだね。キリト」

キリト「おうユウキ」

そこにはキリトが立っていた。

キリトとユウキの関係!?

アスナ「え!?!ちよ!?!どうしてキリト君がここにいるの!？」

キリト「どうしてって言われてもなく、頼まれたから？」

ユウキ「どうして疑問形なの? 僕はちゃんと頼んだじゃんか！」

キリトの登場により、テンパってしまったアスナの問いに疑問形で返したキリト。そしたら隣でそれを聞いていたユウキはむくれていた。そしてそれを見ていたスリーピングナイトのメンバーは三者三様の反応を見せていた。

シウネー「あら、ユウキもお年頃の様子ですね」

ジュン「アイツなんなんだよ。あとから出て来たくせにユウキと親しげにしゃがって」

テツチ「キリトさんは両手に花ですね」

ノリ「へえ、スプリガンに強いやつっていたんだな」

シウネーはユウキの成長を喜び、ジュンは後から出て来たのにユウキと仲良くしているキリトに嫉妬し、テツチはただ男としての羨ましさを隠しながら言い、ノリはマイナーなスプリガンに強い人物がいることが珍しいと感じていた。

アスナ「キリト君? どういうことか説明してくれる?」

キリト「あ、あのアスナさん。もしかして怒ってらっしゃいますか?」

アスナ「全然私は怒ってないよ。だからおしえてくれる?」

キリト「いやいや、絶対怒ってるだろ! えっ? 俺なんかしたか?」

アスナはただ無表情で、それでも声で怒っているのがわかる。

それに慌てて機嫌を損ねた理由を探ろうとしているキリトにユウキはため息をつきながら言った。

ユウキ「キリト、流石にそれは可哀想だよ。アスナはね、心配なんだよ。キリトが」

アスナ「そうだよ。心配なだけだから教えてくれる?」

キリト「そ、そうなのか? ならいいけどなんか機嫌を損ねるようなことをしてたらごめん」

そう言つてキリトはアスナに説明を始めた。

キリト「俺は前々から頼まれてて、受けてやるから後もう一人見つけろつて言つたらこんな事になつた」

アスナ「?ならユウキとは前から知り合いだったの?」

キリト「ああそうだぞ。あれ?言つてなかつたつけ?」

アスナ「聞いてないわよ!」

キリトがユウキと知り合いであつたことをアスナに話している時に、ある人が反応した。

ジユン「ユウキ!前からキリトさんと知り合いだつたつて本当か!」

ユウキ「うんそうだよ」

ユウキがそう答えるとジユンはキリトへ詰め寄り、同時にアスナもユウキに詰め寄つた。

「お前(貴女)はユウキ(キリト君)のなんなんだ(ですか)?」

二人は声を揃えて問い詰めた。それにキリトとユウキも同時に答えた。

「何つて……」

昼寝仲間だけど?」

「へっ?」

ユウキとキリトの答えがあまりにも現実的ではなく、アスナとジユンは二人して素っ頓狂な声を出した。そしてそれを見ていたシウネー達は、

シウネー「あらあらく、青春ですね」

ノリ「あれは青春じゃあ無いと思うよ」

との事。そしてテツチは苦笑い。それはさておき、ユウキとキリトは説明を再開した。

キリト「ユウキがデュエルしてた場所あるだろ?あそこな俺の昼寝

スポットだったんだよ」

ユウキ「それでね、たまたま僕が向こうに行つた時にねキリトが寝てたんだよ」

ユウキ「それで僕が話かけたらキリトがね、『今日は昼寝に一番最適な気温設定なんだよ』って言つてね」

キリト「あ、そんな事も言つてたなく。そういや今度またあの気温設定になる日が来るんだってよ」

アスナ「そんな事はどうでもいいから、早く説明を続けて！」

キリト「つて言つてもなく。後の流れなんてわかるだろ？その後ユウキと一緒に寝てもいいか聞かれて、断る理由もなかったから一緒に寝て、話をして、意気投合した」

アスナ「へえ、じゃあさ今度は私と一緒に寝てくれない？」

キリト「う、ん、アスナとか」

アスナ「もしかして嫌なの？」

アスナは寂しそう（演技）に聞いた。

キリト「嫌つて訳でもないんだけど、こう、アスナとだとゆっくり寝れないんだよなあ」

ユウキ「なら僕と一緒に寝てる時はどうなの？」

キリト「そんな時はなんだかゆっくりできるんだよなあ」

ユウキ「なら良かった」

ユウキは自分と一緒に寝て、キリトの安眠を邪魔しているんじゃないかと危惧したが、そんな事は無いと言われ、無邪気に笑った。

キリト「それよりも作戦会議、始めるぞ」

とキリトが言うと、（約二名は渋々であるが）みんな席に戻つた。

第4話

それから作戦会議は始まり、今はパーティーの構成を考えているところだった。

アスナ「ユウキとジユンとテツチが近接前衛型で、ノリが中距離型、そして、シウネーが後方支援型ね。なら、キリト君は前衛しか出来ないから前衛で良いとして、私は中距離と後方支援をやるわ」

シウネー「えっ!!でもアスナさんに二つも任せるなんて……」

アスナが前衛に入らないことを聞き、ユウキは肩を落としたが、それ以上にアスナに支援と中距離を任せることにシウネーが言った。

キリト「いや、これで良いと思うぜ」

ジユン「あんたが良くても俺たちは良くないの!ただでさえ手伝ってもらっているのにそんな事は頼めない」

キリト「いや、でもアスナだしなく……」

ユウキ「?どう言うこと?キリト?」

キリトがアスナに対して意味深な発言をするとユウキはどう言う事か分からなくて聞いた。そしてキリトの答えは――

キリト「アスナはなるべく後衛に置いておかないと一人で突っ込んでいく可能性があるからなく」

アスナ「もう!私はそんな事しないよ!」

キリト「そんな事しなければ《バーサクヒーラー》なんて呼ばれないよ」

アスナ「うっ」

アスナは基本的には後衛を務めているが、ボス戦などではボスに突撃して行く事からバーサクヒーラーの異名がある。(なお本人は全力で否定している)

キリト「まつ!こんな感じでいいだろう」

ユウキ「うん!なら明日は何時に集合する?」

ノリ「ごめん。あたし夜は無理なんだ」

ジユン「なら明日の午後一時なんてどうだ?」

キリト「その時間なら俺は行けるけど……アスナは?」

アスナ「うん。私も大丈夫」

ユウキ「なら明日の午後一時にここに集合ね！」

「「「「おう」「」」」」

そんなこんなでなんかあつて、アスナはお母さんといざいざがあつたけど、翌日の一時にはみんな集まっていた。

アスナ「皆んな、これが最終確認。

近接前衛型

・キリト

・ジユン

・テツチ

・ユウキ

中距離型

・ノリ

・アスナ

後方支援型

・シウネー

・アスナ

だよ。わかった？」

「「「「了解」「」」」」

アスナの最終確認が終わり、それぞれ酒場を出て行った。

それから少しして、迷宮区中。

ユウキ「ハッ」

キリト「フッ」

アスナ「これ私に来る意味あったのかな？」

シウネー「はい。おかげで私も負担が軽くなりましたし、ノリも多分そう思っていますよ」

アスナ「そう？それなら良かったわ」
ノリ「それにしてもキリトは凄いいよね」
テツチ「確かに：

あそこまでユウキとの連携が高いなんて」

ユウキとキリトはお互いに左右を交代しながら踊るように敵を倒して行っていた。『イメージとしては銀魂の銀さんと土方さんの連携をより早く、より多くした感じですよ。』

ユウキ「キリト！後ろ！」

キリト「なっ！ハッ！サンキュ！ユウキ」

キリトの背後に迫っていた最後の一体を倒してモンスターの群れは終わった。

キリト「んー、気持ち良かった」

ユウキ「それにしても凄いねキリト。あんなに強かったんだ」

キリト「何言ってるんだ？ユウキの方が強いだろ」

側から見たらリア充にしか見えない会話を二人がしたせいでアスナとジュンは少し不機嫌になっていた。

テツチ「それにしてもキリトさんは凄いですね。僕たちの中でユウキが一番強いですから、それについて行けるキリトさんは尊敬します」

キリト「よしてくれよテツチ」

アスナ「むー、なんでそんなにユウキと連携が取れるの？」

ジュン「ユウキ、流星にあそこまで連携を取れるのはおかしいぞ。キリトと何をやったんだ？」

アスナとジュンの質問は最もであった。それに対するキリト達の答えはー

「何もやってないけど？」
であった。

「」「はあっ。」「」

それに対する皆んなの反応は妥当であろう。あれをやろうとするなら何ヶ月の単位で練習する必要があるはずであるから。

ユウキ「ていうか僕はキリトの強さすら知らなかったからね。まさかあそこまで強いなんて」

「「はあ?」」

キリトの強さを知らなかったという爆弾発言にスリーピングナイツのメンバーは又声を上げた。そしてその事実の確認にジユンが行った。

ジユン「ちよ、ちよつとまで。ユウキは実力のわからない人にこんな無謀な事を頼んだのか?」

アスナ「無謀っていう自覚はあるんだ……」

ユウキ「うん」

アスナ「逆に何でキリト君はこれを引き受けたの?」

キリト「別にこれと言った理由はないんだけど、あえて言うなら

……

面白そうだったから」

キリトの頭の悪い回答にアスナは顛顛を抑えながら「そういえばこんな人だった……」と呟いたのであった。

ボス部屋前の話

それから少し経ち、スリーピングナイトとキリト、アスナの七名はボス部屋の前まで来ていた。

アスナ「みんな、ちよつと待って！」

アスナはそう言うと、魔法の詠唱に入った。

そして詠唱が終わると、手の平の上に胸ビレが翼のようになった魚が五匹現れた。その魚とは、隠蔽魔法を看破する為の《サーチャー》である。そしてそのサーチャーにアスナは顔を寄せ、ある柱の方向に向かって息を吹きかけた。すると、その方向に進んでいったサーチャーの内、二匹はアスナの気づいた空気の揺らぎの中に突入した。すると、ぱつ、ど青い光が広がり、サーチャーが消滅し、その奥にあった緑の空気の膜が消えていった。

キリト「なっ！」

ユウキ「あっ！」

ユウキとキリトは驚いたような声を出した。

そして、先程まで隠蔽魔法で隠れていたと思われる場所には、インプが二人とシルフが一人いた。さっきの隠蔽魔法はシルフの魔法であったのだ。さらにその三人は全員短剣の軽装ではあるが、グレードはそれなりに高い。そして、そのカラーカーソルに表示されたギルドタグは二十三層から迷宮区を立て続けに攻略している有名な大規模ギルドのタグであった。ボス部屋前は敵モブは湧かない為、そんなところで隠れていた場合はP ^{プレイヤーキル} Kの可能性が高い為、皆それぞれの武器を手に取っている。

「さてさて、俺たちは別に戦う気は無い」

アスナ「なら武器を仕舞って！」

アスナの言葉に渋々と言った感じに武器を収める三人。

だが、アスナの警戒は解けておらず、シウネーにとあることを告げた。

アスナ「もし、あの人達が武器に手をかけようとしたら《流水縛鎖》^{アクアバインド}を掛けて」

シウネー「はい。でもALOでの対人戦は初めてでドキドキします」

キリト「アスナ、ユウキ。奴らからは警戒は解くなよ」

「うん」

キリト「なあ、俺たちボス戦したいんだけどさ……」

「ん？ああ、別に構わねえよ」

キリト「あんがとよ」

キリト達が先にボス戦をすることには何も言わずに見送ろうとしていた。だが、キリトとアスナ、ユウキはその三人を常に視界の端に置いていた。

アスナ「それじゃあみんな、HP・MPを回復して」

アスナの声に従い、皆それぞれ自分のポーシヨンに手をつけた。

ユウキ「よし、みんな。勝つよ！」

「「「おう」」」」

ノリ「いやゝ負けた負けた」

ユウキ「うゝあのモンスター硬すぎだよ」

ノリが笑いながら、ユウキは少し落ち込みながら言っていた。その中でキリトだけが浮かかない顔ををしていた。

ユウキ「うにゆ、どうしたの？キリト？」

キリト「えつとだなく。まずみんな、すまない」

テツチ「？どうして謝るんですか？」

キリト「もしかしたらなんだけど、あの戦闘を見られていたかもしれない」

ギルド抗争前

キリト「もしかしたらあの戦闘、見られてたかもしれない」

キリトの言葉にアスナ以外のメンバーは絶句した。

アスナ「でもどうやって見てたの？」

キリト「それなんだけど、戦闘中にジュンの足元に灰色の小さなトカゲのようなものがいたんだ」

アスナ「てことは『盗み見』ね」

キリト「ああ」

盗み見とは、プレイヤーに使い魔を付けて、視界を盗む闇魔法である。そしてそれは、付けられた瞬間に一秒だけ妨害魔法のアイコンが出る。

ジュン「まじかよ！全然気づかなかった」

ジュンはバツの悪そうな顔になったが、それをフォローするようにキリトが続けた。

キリト「いや、ジュンは悪く無いよ。多分シウネーに支援魔法の更新の詠唱に紛れてつけられたんだと思うんだ」

キリトの説明を受けた後、ユウキがハツと何かに気づいたように顔を上げて、尋ねるように言った。

ユウキ「ねえ、もしかして25層と26層で僕たちが全滅したすぐ後に攻略されちゃったのってー」

キリト「ああ、多分同じ方法を取られたな」

キリトの答えにみんなは一瞬で顔を曇らせた。

そんなみんなを見て、アスナが突拍子も無いことを言った。

アスナ「みんな！諦めたらダメよ！まだ可能性はあるわ」

テツチ「可能性…ですか？」

アスナ「そう！みんなの後五分でミーティングして、三十分でボス部屋まで戻るの！」

ノリ「でも私たちの戦闘は見られたんだろ。今から行っても間に合わないと思うけど……」

キリト「それなら大丈夫だ。メンバーを集めるのに最低でも一時間

は必要だからな」

ユウキ「ならそうと決まれば早速ミーティングだー!!」

その後、ミーティングを終えた七人はボス部屋まで向かっていた。

キリト「後二分だ！ラストスパート全力で行くぞ！」

キリトの声に合わせて全員がスピードを上げた。

そしてボス部屋まえには着いたが、そこには、種族のバラバラな、でも一つの共通点を残した者達がいた。その共通点とはギルドのエンブレムである。盾に馬の横顔、先刻待ち伏せをした奴らと同じギルドエンブレムである。

ー間に合わなかったか!!

キリトはそう思い、ユウキは不安そうにしているが、アスナはユウキに近寄り、こう言った。

アスナ「大丈夫よユウキ、一回なら挑戦ができるわよ」

ユウキ「……ほんと？」

それでも不安そうなユウキにアスナは笑顔を向けていた。

その隣でキリトは何かをしていた。

そしてアスナは集団の方へ歩いて行った。

アスナ「ごめんなさい、私たちボスに挑戦したいの。そこを通してくれる？」

「悪いな、ここは通行止めだ」

アスナ「どうしてかしら？」

「これから俺たちのギルドが先にボス戦をやるんだわ。そんではその準備中だ」

アスナ「その準備はいつ終わるの？」

「一時間くれえかな」

アスナは先頭にいたノームの男と交渉しているが、こちらの意見は通りそうに無いのを自覚していった。

彼らの行動は、至極単純で、攻略しそうなギルドを邪魔しているの

であった。

アスナ「一時間もかかるなら先に挑戦させて下さい」

「そりゃ無理だわ。こっちが先に来てるんだから順番くれえは守ってくれや」

アスナ「こっちは準備が終わってから来てるの。そもそもこんなところでの準備は迷惑だとわからないの？だからボス戦を先にやらせて下さい」

「そんなこと言ってもどうしよもねえんだわ。文句があるならイグシテイの本部に行ってくれねえか？」

アスナ「そんな所まで行ったらそれこそ一時間経っちゃうじゃない！」

アスナは大声を出して言い返したから、心を落ち着けるために唇を噛み、深呼吸をした。

これ以上の交渉をしてはも無駄なのは自明の理であるが、ギルドどうしでの戦争になれば負けるのは此方側である。

そんなことを考えていると、ユウキが前に出た。

ユウキ「ね、君」

「ああ？」

ユウキ「つまり、僕たちがもうどれだけお願いしても、そこからどいてくれる気は無いつてことだよね？」

「ーぶっちゃければ、そういうだな」

ユウキ「じゃあ仕方ないね。」

ユウキ「ー戦おつか」

キリト「ま、それしかないよな」